

Title	<文学環境>の視点から見た『白樺』：『白樺』の研究・序章
Author(s)	清水, 康次
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2010, 44, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/12794">https://hdl.handle.net/11094/12794</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 〈文学環境〉の視点から見た『白樺』

——『白樺』の研究・序章——

清水 康次

はじめに

『白樺』は、今からちよūd百年前の一九一〇（明治四三）年四月に創刊され、一九二三（大正一二）年八月まで、十三年あまり発行を続けた文芸同人雑誌である。その誌上においては、武者小路実篤や志賀直哉をはじめとする多くの作家たちが登場し、多数のすぐれた文学作品が掲載されただけでなく、文学界のみならず、当時の文化や社会に影響を与えるような批評活動・啓蒙活動が展開され、また、西洋の近代絵画が紹介され、文学が美術と共存し続けた。通常の文芸同人雑誌の域を越えて、文学史的にも文化史的にも多くの足跡を残した雑誌である。

この広範なジャンルを包含する多彩な雑誌を研究するには、文学作品の内部とそれを取り巻く外部（環境）とをあわせて捉えようとする視点が有効であるように思われる。「文学環境論」という、より広い視野を持って文学を見なおそうとする試みが、方法として成熟していくためにも、『白樺』は恰好の研究対象であると思われる。今回はまず、『白樺』を〈文学環境〉の視点で捉えることで何が見えてくるのかを考え、これからの研究の方向性と

課題を明らかにしておきたい。

### 一 『白樺』の持つ結束力

『白樺』について、紅野敏郎は、「あしかけ一四年間、その間たった一度の合併号を出したのみで全一六〇冊出しきったその永続性、その周辺に与えた影響力は、同人雑誌の歴史のなかでは最大最強といつてよい」と位置づけ、四つの特色を挙げている。<sup>①</sup> 第一に、「十人十色の個性を徹底的に生かしきる」こと、第二に、「美術雑誌の要素」を強く持っていたこと、第三に「きわめて堅固で長くつづいた」同人たちの友情に支えられたこと、第四に、「文壇に出るための予備的要素を持った同人雑誌ではなく、おのれの内的要求に忠実にしたがって持続された広場であった」ことである。また、西垣勤は、同人たちが、「特権階級・ブルジョアジーの階級が形成・確定され、その「家庭」に生い育つたはじめての世代」であることに注目する。そして、「階級の特権性」を否定する思想に出会い、「出自と思想の矛盾」に悩むことが、同人たちに共通する「青春の一断面」であったと捉える。<sup>②</sup>

「個性を生かす」「美術への傾倒」「友情」「持続された広場」「ブルジョアジーの階級」「矛盾・煩悶」「青春」などの多くのことばが、『白樺』の特色として列挙される。しかし、それらの特色が、掲載された文学作品とどのように結びついていたのかは、十分に解明されているとはいえない。また、特色として挙げられる多数のことばが、互いにどのように結びついていたのかも明らかにされていない。

同人たちが個性を生かすことは、彼らが一定の枠組みに収まらないことを示している。通常、そのような同人雑誌は共同歩調を保てず、「持続された広場」にもなりにくい。『白樺』の同人たちがみずからの個性に忠実でありつ

つ、なお「白樺らしい」といえる共通の方向性を持っていたとすれば、矛盾する側面が共存していたことになる。そもそも「白樺らしさ」といえるものがあるのかどうか。あるとすれば、それは何か。そして、どのようにして、個性的でありつつ協調的でもありえたのか。彼らの個性と、彼らを結びつけているものについて観察していくことから始めたい。

『白樺』が同人雑誌であるという点に、もう少し立ち止まってみる。紅野は、「同人雑誌の歴史のなかでは最強」と述べていたが、通常、同人雑誌というものは「最大最強」である必要はない。例えば、東京帝国大学の学生たちの作った第二次『新思潮』（一九一〇・九―一一・三）を見てみると、小山内薫を別にすれば、同人は大貫晶川・木村荘太・小泉鉄・後藤末雄・谷崎潤一郎・和辻哲郎の六人で、発行期間は七か月であった。

谷崎は「刺青」、「象」、「麒麟」を新思潮に発表して、見事、文壇に登場した。（中略）そして最も注目すべき一事は、（中略）新思潮その者が文壇に押し込まれたことである。新聞の寸評氏や、雑誌の月評氏は、新思潮の作品に月旦を加えたからである。

私も谷崎の麒麟尾（てこ）に附して、文壇にデビューした。（中略）「新思潮」は同人の文壇登場を目的とする機関であったから、この同人雑誌は本来の使命を果したものと云わなければならない。新思潮は第七号を以って、終刊の幕をおろしたのであった。<sup>3</sup>

文学史上、同人雑誌は、一つの型に定着し、特に大正期から昭和期にかけて盛んに発行される。その型とは、無

名の文学青年たちが、同じ大学に通うというような縁故的な結びつきをきっかけとして創刊し、文学修行の場所とすると同時に、外部への発信の場所とし、同人中の何人かが文壇に進出して役割を終えるという型である。

ところが、『白樺』は、学習院出身者という結びつきから生まれた同人雑誌であるにもかかわらず、文壇への足がかりという役割を越えてなお持続していく。例えば志賀の小説をたどっていくと、創刊号に実質的な処女作である「網走まで」を発表した後、次々と作品を掲載し、初期の主要な作品が『白樺』に発表される。この時点で、志賀は文壇への進出を果たしており、その後、最初の休筆期間に入るが、三年間の休筆の後にも『白樺』はなお健在であり、創作活動を再開する際の「城の崎にて」（一九一七・五）がその古巣に発表され、後の「小僧の神様」（一九二〇・一）も『白樺』に掲載されている。

同人たちは、それぞれに作家として独立した後にも、『白樺』とのかかわりを続ける。中心になって運営する者としばらく遠ざかる者とは交代しつつ、号を重ねる。そのことが、紅野の「文壇に出るための予備的要素を持った同人雑誌ではなく」という特色につながるのであるが、この長い結びつきを支えたものは何だったのだろうか。

同人たちが「ブルジョアジーの階級」であったことで、雑誌への支持を続ける経済的・時間的余裕があったことは見逃せない要因であろう。もし彼らに経済的な余裕がなければ、一応の役割を終えた同人雑誌にかかり続けることはなかっただろう。

その余裕にも支えられて持続した友情という要因はさらに重要である。しかし、友情はうつろいやすく、結合の力となることもあれば、離反を生んでしまうこともある。「きわめて堅固で長くつづいた」友情に支えられたという説明は、それだけではまだ説得的ではない。彼らの友情が持続したのは偶然の結果だったのか、友情を持続させ

る原因や条件が存在したのかを考えていかなければならない。

同人の個々について見ていくと、『白樺』の同人たちの友情は、複雑でかつ濃密である。例えば、志賀と有島生馬の関係は、無二の親友から強い拒絶へと変化する。

君と初めて知つたのは幾つの時だつたらう。学習院の初等科五年の時だつたやうに思ふ。一緒に中等科に進んだ記憶があるから、十一か十二の時だ。今、君は六十五、僕は六十四だから、半世紀以上、——その間、若し友情が続いてゐたら、半世紀以上の交りといふ事になるのだが、君が画の勉強に最初は羅馬に、それから巴里に移り、何年かして、二十六七で、大家然とした顔つきをして帰つてから、二人の間は段々と疎遠になつた。それまでの君は僕にとつて、兄事する唯一の親友だつた。

（「蝕まれた友情」<sup>4</sup>）

生馬が、どのような経緯をたどつて「大家然とした顔つきをして」帰国して来たのか、また、そのときの生馬の思ひについてはいずれ見ていきたい。志賀は、その「大家然とした」装いに違和感を持ち、次第に疎遠になつていくのだが、かつての友情が途絶えたというだけには終わらず、長い年月こだわり続けて、三十年以上も後に、この「蝕まれた友情」を発表している。一体、どのような友情がそれほどの拘泥を生むのだろうか。

僕には少年時代から青年時代にかけて、君に対し持ち続けて来た親愛の情が、未だに僕の体内の何所かに残つてゐて、それが何かの機会に不意に甦へる。（中略）かうしてペンを執つてゐる時、僕の頭に浮ぶ君といふもの

は現在の君ではなく、五十年前の、四十年前の君になるといふのは何といふ変な事だらう。君ばかりでなく、僕自身までが四五十年前の僕になるのだ。

(同前)

ここで志賀が言おうとしているのは、嫌悪とか失望とかの感情の問題ではなく、相手が自分にとって占める位置の問題だといえる。疎遠になって三十年以上も経つのに、生馬への「親愛の情」は「僕の体内の何所かに残つて」おり、生馬は、今も志賀の内部に深く食い込んで存在している。どんなに排除しても、生馬は、志賀の外部に退かない。友情というものについて、自分と外部の他者とを結ぶ感情の糸であると説明すると、一見もつともらしく聞こえるが、実際はそのようなわかりやすいものではなく、親友は自分の中に踏み込んでこようとすると、自分もまた、親友の外部におとなしく控えてはいないのではないか。志賀の生馬へのこだわりは、今もなお自分と外部とのすきまに居座つたままの存在に対するとまどいから来ているといえるだろう。

考えようとしている問いは、同人たちを結びつけたものが友情であるかどうかという問題だけではなく、そもそも友情とは何なのだろうかという問題でもある。例えば、近世にも、志を同じくする者の同志的な結合はあり、公の世界を離れた遊びの世界での交友もある。しかし、自分というものにこれほど深く食い込んでくる他人の存在、また、そのような相手に対する友情という感情は、いつごろから生まれるのだろうか。

例えば漱石は、恋愛と友情との相克する三角関係を何度も描いているが、「それから」(一九〇九・六―一〇)の代助と平岡の友情も、「こゝろ」(一九一四・四―八)の先生とKの友情も(先生にとつてのKは別の意味で重い存在になって行くが)、志賀と生馬の友情のように緊密ではないように思える。実篤に、「それから」を意識して書

いた「友情」（一九一九・一〇～一二）があり、いずれ見ていきたいと思うが、公のモラルにも通じるような友情ではなく、より直接的に個人と個人を結びつける友情は、『白樺』の時代に始まるのかもしれない。そして、このような友情の問題は、人間関係の問題ではなく、自己の主体の問題と捉えるべきかもしれない。

## 二 『白樺』という場

同人たちを結びつけるもう一方の要素として、思想の共有や求める理想の一致が考えられる。縁故的な結びつきをきつかけとして生まれる同人雑誌は、一応、思想や理念を共有する結社の機関誌とは区別できる。しかし、実際には、同人たちが自分の文学の理想について親しく語りあう中で、近似的な文学の理想像を持つようになることは少なくない。同人雑誌と結社の機関誌との境界は鮮明ではなく、仲間たちの作る雑誌というものは、強弱の比重は異にしているも、両面を共存させている場合が多い。彼らの結びつきには、縁故や友情という、よりプライベートな結びつきと、思想や理想像の共有という、よりパブリックな結びつきとの二面性があるのである。

『明星』は、与謝野寛の主宰する新詩社の機関誌であり、一九〇〇（明治三三）年四月から一九〇八（明治四一）年一月まで比較的長く継続し、全一〇〇号を発行した。会員たちは、基本的には、主宰者である寛の文学の理想像や運動の理念に共感し、また誌上に掲載される作品に共鳴して各地から集まったのであり、『白樺』や『新思潮』の集まりとはきつかけが異なる。寛は、新詩社において、強いリーダーシップを揮って会員たちを鞭撻し、指向性を持った文学運動に巻き込んでいく。その一方で、文壇の著名な文学者たちを呼んでサロンを開催し、会員の心を惹きつけていた。木下杢太郎は、その華やかな晴れの場について次のように回想している。



明治四十年、僕は大学の一年生であつたが、長田秀雄君に紹介せられて始めて新詩社に入つた（中略）。今でも類の少いことであるが、当時の、極めて其数の少い文学的サロンとしては新詩社は随一のものであつた。その頃の文壇人は、とても今ほど多くはなかつたから当時一流の名匠は多くはこのサロンを訪ひ、我々弱輩も容易にかかる人々に面接することが出来た。馬場孤蝶氏、戸川秋骨氏、千葉掬香氏、蒲原有明氏などがそれであつた。（中略）時々の会合には軍服姿の鷗外博士、瀟洒なる柳村先生も、夕方の弁当を前にし、歌を作られ、また談論せられた。<sup>5)</sup>

スターたちの居並ぶ社交の宴が、『明星』の結合を強める働きをしていたことは確實だろう。雑誌という作品發表の場は、人々の集う実際の会合によって補完される。

この時代の日本の文壇において、仲間たちが集う場、出会う場として、雑誌と集会はいずれも大きな役割を果たす。しかし、その両輪のとる形はさまざまである。例えば、漱石の場合、「朝日文芸欄」という雑誌に見合う場があり、「木曜会」という集会があつて、門下生たちは、漱石という主宰者に二つの場所でお出会うことになる。「木曜会」が『明星』のサロンと異なるのは、漱石が「大明神」として鎮座し、参加者がそれを取り巻くという、はるかに個人的な集会であつた点である。しかし、その「木曜会」も時代とともに変化する。当初、漱石には、東京帝国大学の教え子たちと自由に話し合い、仲間として意見を交わしたいという思いがあつた。それ自身、困難な願望であつたが、漱石が大学を辞め、流行作家になつていくにつれて、「木曜会」は漱石の公式会見の場となり、セレモ

ニ一化していく。来客の数も増え、目的も変化し、芥川龍之介が訪れるころには、『明星』のサロンと近似する晴れの場となる。当初漱石が期待したような心を許した会話は、ますます困難になっていく。このような「木曜会」の推移に対して、鷗外の主宰した「観潮楼歌会」は、当初から、より公的な発想で開催されていた。雑誌がそれぞれに個性的であるように、集会もまた、それぞれに特徴的であった。

さまざまな雑誌と集会が、明治末期の日本の文壇に開花し始める。それは、日本の近代文学が成熟し、自律的な動きを獲得したという証しである。鈴木信太郎は、「フランス象徴詩派覚書」において、十九世紀末の「象徴詩派」の活動について次のように述べる。

マラルメ、ヴェルレエヌ、ランボオを宗とした象徴詩派が、青年文学者の間に燎原の勢を示して世人の視聴を歆てるに至つた経緯には、異つた三種類の集団を看過することが出来ない。即ち、カフェとサロンと雑誌である。

カフェを中心としては、数多くの団結、倶楽部が設立されて、新しい頽唐或は象徴の美学に陶醉した青年が相互に影響を与へつつ、高踏派の美を象徴した。(中略)

一八八五年前後に於いて、カフェを中心とする幾多の集合、及びマラルメの火曜会等が形成せられたのと平行して、多数の小雑誌が象徴詩派の大流の中に、泡沫の生命を託して、発生し消滅したのであつた。<sup>6)</sup>

カフェに集うグループ、サロンに形成される文壇、そして雑誌というメディアによる広範囲の発信——。十九世紀末のバリの〈文学環境〉が、二十世紀初頭の日本において実現しているのであり、当時の日本の文学者たち

は、ヨーロッパの先進国のありように近づき、追いつきつつあったといえる。

〈文学環境〉という視点で周囲を見渡していけば、そのような当時の日本の文学者たちの位置や姿勢が見えてくる。さらに、当時の文学者たちが、いかに仲間というものを重視していたかという、彼らの内なる欲求も明らかになってくる。『白樺』という場に光を当て、同人たちが、仲間・文壇・社会という同心円的な広がりの中で文学を形作っていく姿を捉えていくことが、これからの研究の方向性である。

さて、『明星』のような主宰者に率いられた結社の集まりは、強い連帯感や訴求力を作り出すために、会員を主宰者の意向に拘束する。リーダーシップによって会員を統括してこそ運動が成り立ち、「浪漫主義」というような理念も実体化されていくが、会員の受ける束縛感が強くなりすぎれば、小さなきっかけからでも、結社そのものが崩壊していくことになる。李太郎は、先の文章に続けて、『明星』の崩壊を語っている。

明治四十一年から「明星」は「大刷新明星」といふ意装で、一層美々しく現はれる事になった。然るにここに予想外の事が突発した。即ちそれから間もなく、北原、長田兄弟、吉井、秋庭、それに僕がくつついて新詩社を出た事である。その原因の一は、「大刷新明星（新年号）」に、蒲原、上田、薄田の諸氏の新体詩が、四字活字で麗々しく組まれたのに反して、社中のものは常の如く五号二段組で片付けられた事であつたらう。殊に気を負うてゐた北原は心甚だ不平であつた。（中略）当時「明星」では右の連中が中堅であつたから、「明星」も其歳百号を記念として廢刊するに至つた。其頃森鷗外先生にお目にかかると、与謝野君も若い連中に逃げられてしまつたと云つて笑つて居られた。

結社の機関誌は、団結の強さともろさを諸刃の剣のように持っている。そして、『白樺』も、実篤の思想的な唱道が強まった時代には、結社の機関誌と似た面を持っていた。志賀は、「人道主義の色彩」が強まった時期には、『白樺』から遠ざかったと回想する。

ぼくはね、大正九年ごろは「白樺」はもう……個人的にはみんな親しかったけどね、雑誌は人道主義的か何かで……。犬養（健）だとか近藤経一、ああいう連中も入って来てね。（中略）とにかくいわゆる人道主義の色彩が非常に濃くなっちゃって、ぼくら何だか居心地が悪くなって来てね。（中略）それでだんだん離れたよ、ぼくや里見なんぞ。<sup>7)</sup>

志賀にとって、『白樺』は「仲間」「連中」としてあって、実篤の唱道するような「運動」の母体ではない。「人道主義」というような思想の共有を促され、運動への参加が望まれる時期には、『白樺』から身を引いて、あくまでも自由であり続けようとしている。もし「白樺らしさ」が実篤の唱道する思想にあるのならば、その「白樺らしさ」は、個性を生かすことと正面から対立してしまっていたらう。しかし、志賀は同人をやめようとはしていない。実篤とその思想に共鳴する同人たちが中心的な役割を果たすときにも、志賀たちは距離を置き、敬遠しつつも、それを見守り続ける。一方で、実篤も、考え方の違う友人たちが袂を分かつていくほどには、自分の思想を、あるいは社会運動を『白樺』に持ち込みはしなかった。実篤は、「新しき村」の運動を進めるためには、より直接

的な別の場を作って、そこに移っていくのである。実篤の唱道する運動への賛同は強い要請にはならず、『白樺』は、結社の機関誌にはならなかった。

『明星』の盛衰と比較すれば、ほとんどの者が同人にとどまり続けて、自分たちの活動を十分に世に発信することのできた『白樺』は、やはり希有な持続を成功させている。志賀が「個人的にはみんな親しかつたけどね、雑誌は人道主義的か何かで」というように、縁故的な結合と結社的な結合とが、矛盾しつつもうまく共存していたことが、長い持続をもたらした理由の一つだろう。そして、彼らの共有するものが、文学的な理想であれ、思想的な理想であれ、漠然としたものにとどまり、明確に党派性を持ったものに尖鋭化していかなかったことも、持続できた理由の一つに数えられる。

本多秋五は、早くに、同人の「混成状態」に注目している。

『白樺』創刊号の目次裏には、発刊の辞に代るべき無署名の一文が掲げられており、そこに「十年後を見よ」という武者小路らしい文句が書き込まれている。ところが、巻末の『発刊に際して』という追込み欄をみると、「大将株はこの雑誌に何かエライ意味がある様に思つて喜んでゐるが、自分の考にすれば、これは単に黒く書き汚した草紙の上の手習に倦きた小供が、白い紙の上で何か書いて見たいと云ふ願を起す、丁度あの位のほんやりした願から生れたもの」だ、と里見弴が書いている。(中略)ここに、いわゆる「大供連」と「子供連」の勢揃いした『白樺』同人の混成状態がうかがわれる。と同時に、そこに雑誌『白樺』そのもの、および『白樺』派の仕事全体に通じる、大望と手習草紙意識とのユニツクな融合をみる<sup>(8)</sup>ことが出来る。

本多は、このようなさまざまな意識の「混成状態」を指摘しつつ、さらに、誌上に掲載される作品の質的な、あるいは価値的な「混成状態」を『白樺』の特徴と述べていく。

雑誌『白樺』が永続した理由のひとつは、たしかにこの手習草紙意識にあり、精力も鼻柱も減法つよい同人たちが、市場をめあてにせず、商業雑誌にはおそらく掲載場所も見つかりそうになかった大量の原稿を、もっぱら自己満足目的に書きつづけたことにあった。『白樺』派の仕事には、当時の社会的水準に照らして抜群のもの、水準以下のものが奇妙な形で混在し、それが大望と手習草紙意識の交錯に支えられていたと思う。

強い連帯感や鮮明な思想が組織を継続させるとは限らない。さまざまなものの共存を許す包容力が組織を強化する場合もある。「白樺らしさ」とは、そのような許容量にあり、レベルの低い力作を排除せずに掲載し続けたことが、誌面に独特の風貌を与えていたとも考えられる。質の高さや完成度を競うのではなく、仲間の熱のこもった凡作を受け入れてやるような優しさが、彼らを結びつけていたものの一つであったと考えることができる。そして、それが志賀の絵画に対する「素人」意識という独自の評価基準や、柳の「下手物」を通しての「民芸」の発見につながっていったとすれば、そこにこそ、既存の価値観を転倒し、新しい価値観を樹立していく契機が潜んでいたことになるのである。

### 三 文学と美術との混在

東珠樹は、『白樺』の西洋美術紹介について、次のように概括している。

創刊号発行以来「白樺」が西洋美術の紹介と啓蒙についやした努力は、他にその例を見ないと言ってよいだろう。文芸雑誌が美術をとりあげるといふことは、「明星」や「スバル」「方寸」などの例にもみられるように、決して「白樺」の独創ではなかったかも知れないが、「白樺」のそれは、文芸雑誌というよりは、むしろ、美術雑誌と言った方がよいほど、徹底したものであった。<sup>9)</sup>

中谷博は、そのことを読者の側から説明している。

『白樺』の声価は第八号の「ロダン号」を出した時に決定したものである。一年も前から十分に準備をして、ロダンに手紙も出し、(中略) 何処から見てもスキのない雑誌が出来たわけである。(中略) これでスツカリその当時の若い世代は『白樺』に惹きつけられてしまい、固定した読者がファンさながらに此の雑誌を取り巻くことになったのである。それからは一月号・四月号・十月号と毎年特大号を打出して、その新鮮さとその芸術的香気とで以て、ゲンゲンと読者を増して行った……<sup>10)</sup>

『白樺』は、なぜそれほどに西洋美術に惹きつけられたのか。なぜそれほどに美術の要素を誌上に増やしていったのか。この問題は早くから問われながら、まだ納得できる説明はなされていない。

西垣勤は、冒頭でふれた文章の中で、同人たちの「矛盾」に悩む内面と西洋美術への傾倒を関連づけている。当時の実篤について、「トルストイズムを棄て、ひたすら自己の成長をめざす強靱な自我意識を固めることで文学の出發を果たそうとしていた」と位置づけた上で、「絶対の自我肯定とそれによる成長意識」の拠り所となったのは、まずメーテルリンクの思想であり、「それと同時に、彼らが日本の現実をひとまず無視し、世界的な広がりを目を向け、「人類」という言葉を実感できたことには、もう一つ、西洋絵画への傾倒によるところが大きかった」と述べている。<sup>11)</sup>

同人と先述した画家たちとの交流、協力のなかでの、西洋近代美術への傾倒、とりわけ、既成の権威を否定して、自らの主体の権威を伸長しようとした後期印象派の絵、そしてその劇的な人生への共鳴は、彼らの自我至上主義を大きく支えたといえるのである。

少し言い方を変えれば、後期印象派の絵画と接することで、その画家たちの「劇的な人生」に「主体の権威を伸長しようとした」姿を発見し、自分たちの求める生き方の理想として感動し、共鳴し、また自信を与えられたということになる。いずれ詳しく見ていきたいが、美術史の研究者たちからも同じような指摘がなされている。

『白樺』の同人たちが、ロダンやゴッホの生き方を、自分たちの生き方の理想とし、拠り所としていたことは重



要である。西洋の絵画は、彼らを勇気づけ、自信を与える。しかし、その前にまず驚嘆があり、芸術そのものに対する感動があつたはずである。そして、『白樺』誌上に満ちている紹介文と写真版を作り出していくためには、大きな熱意と努力が必要だつたはずである。さらに、そのような文学と美術の混在する雑誌が、多くの人々に支持され、歓迎された理由も問われなければならない。画家の生き方を自分たちの生き方の模範にしたという説明だけでは、西洋美術の紹介の総合的な重量には釣りあつていかないのである。

中谷博は、先の文章に続けて特大号の印象を記している。

……十週年記念号は本文五百五十頁、挿画三十三枚と言つた工合で、ドッシリと持ち重りのする雑誌が、紙質もよく、インキの匂いもかんばしく若い読書人の前に置かれたものだ。若い武者小路が十年後を見よと神経質な気焔を上げた、あのささやかな同人雑誌が斯くも堂々たるものに成長して、新しい文学の王座を占める日が来たのだから、同人たちの喜びと満足とがどれほどのものであつたかが想像できる。

若い学生たちの作つた、日本の一文芸同人雑誌が、西洋という異文化圏で作られた美術を写真版で挿みこんで、それを初めて見る購読者たちに届ける。毎号挿まれる写真版、文章での画家と作品の紹介、そして、写真版を満載した特大号。その繰り返しだが、同人雑誌を、西洋美術を紹介する、当時の最有力のメディアに育て、文化史に残る貢献にもなっていく。これはやはり希有な事態であり、もつと具体的で、もつと丁寧な説明が必要だろう。

志賀は、先に見た対談の文章において、「人道主義」の「運動」からは遠ざかったと語っていたが、「蝕まれた友

情」においては、『白樺』の活動を、芸術に対する「運動」と捉えている。なお、この文章の「重見」は実篤であり、「水楢」は『白樺』を指す。

僕達は必ずしも同じ考であの同人雑誌を始めたわけではなく、創刊号に重見が書いたやうに十人十色、勝手に自分の仕たい事をするといふ建前で始めた雑誌だった。只、皆に共通したものは芸術に対する強い熱情だった。これで皆は結ばれてゐた。さういふ意味で僕は「水楢」は、芸術に対する熱情の運動といふ方があたつてゐると思ふ。芸術に対し、謙虚な気持を持ち、望みだけは大きく、全心を傾けて、それに邁進しようとした。

志賀の言う「芸術に対する熱情」は、それぞれの個性を生かすことで生じる同人たちの相違を、大きく包み込むような役割をしたのではないだろうか。これこそが、同人たちを結びつけた最大の力であつたかもしれない。先に見た『白樺』の許容量も、仲間たちの持つ「芸術に対する熱情」を信じていたからこそ生まれたものといえるのではないか。

『白樺』における西洋美術の紹介が、どのような状況において、どのような条件の下で行われたのか。そのきっかけ、目的、具体的な方法、成功した理由などを、実態に即して追跡していきたい。そして、彼らの中で、文学と美術とがどのようにかかわり、彼らが美術から何を得ていたのかを解明していきたい。

#### 四 共通項の所在

『白樺』の特色として見てきた、個性を生かすということ、友情というつながり、雑誌や集会という仲間たちの集う場、文学と美術との混在、芸術への強い熱情というような要素は、『白樺』だけに認められるものではない。明治末期の日本の文壇には、その中の複数の要素を持つ雑誌やグループがいくつも見出せる。次の論文では、『明星』『方寸』『パンの会』など、『白樺』に先行する他のグループの動向を見ていきたいのだが、「パンの会」が憧憬し、モデルとした、十九世紀のパリにおける芸術運動、すなわち、エミール・ゾラたちのカフェ・ゲルボワでの集いとそこから生まれた芸術運動を見てみると、『白樺』と多くの共通項を持っていることに気づく。

美術史上では、六六年頃から七〇年の普仏戦争勃発まで続いたカフェ「ゲルボワ」の集まりは有名である。すなわち、マネを中心として既成のアカデミックな画壇に反旗をひるがえした前衛的芸術家たち（ドガやバジュー、ギユメ、デュランティ、モネ、ピサロ、ルノアール、ファンタン・ラトゥール、ナダール等）がそのカフェに集まっては激論を闘わせたのであった。モンマルトルの丘の西麓バチニョール地区にあったからいわゆるバチニョール派と呼ばれている人たちの集まりで、ゾラも常連であった。ほとんど口をきかなかつたらしいがセザンヌも時折り顔を出していた。六三年頃からすでにジャーナリストとして活躍を始めていたゾラは彼らの議論に熱心に耳を傾け、グループのスポークスマンとして六六年、エヴェヌマン紙に激的なサロン告発的な美術批評を書き、スキヤンダルの標的になっているマネこそ新しい時代の力強い芸術だと強力に擁護したこ

とはよく知られている。<sup>12)</sup>

ここでいう「サロン」は、フランスの官展のことだが、一八六三年、審査委員会の決定で、この年の「サロン」では、「草上の昼食」を含む三点を応募していたマネは落選となる。「サロン」開幕の後に、別の場所で「落選展」が開催され、マネの「草上の昼食」がセンセーションを巻き起こし、マネは、激しい非難の的となる。ゾラは、因習化していた「サロン」に反抗する若い画家たちに賛同し、マネ擁護の論陣を張ることになる。

そのカフェでは、木曜日の夜が定例会のためにとっておかれ、いつも必ずといっていいほど一群の芸術家たちが、夢中になって活発に意見を交わしているのが見られた。マネはのちにこのときのことを思い出して語っている。「際限なく意見を戦わすこうした『雑談』ほどおもしろいものはなかった。そのおかげで、我々の感覚は磨かれ、何週間にもわたって熱中することができ、そうして意見をきちんとまとめることができた。我々は考えをもっとわかりやすく明確にし、意志をさらにしっかりと固めて、そこから立ち上がることができたのだ」。<sup>13)</sup>

日常的な意見交換、繰り返し返される論戦。共感と反感の中で鍛えられていく、それぞれの芸術の理想像。カフェ・ゲルボワでの美術家と文学者との集まりには、時代を切り開こうとする熱気があり、緊張した芸術への思いが共有されている。この時代の芸術家たちが自分の個性を生かすためには、孤独に自分を見つめること以上に、仲間たちとともにあることが必要であったのかもしれない。そのようなありようは、『白樺』の同人たちの作っていた場と

非常によく似ている。

一八七〇年前後のゾラは、自宅でも、木曜日に私的な集会を催して、仲間の画家たちを招く。そして、ゾラは、後に小説「制作」（一八八六年、「ルゴン」マッカール叢書」第十四巻として刊行）において、カフェ・ゲルボワやゾラ宅での集いを材料にして、主人公の画家クロード・ランティエの半生とその仲間たちの姿を描く。クロードは、ゾラの幼なじみであり、親友であったセザンヌと、ゾラが擁護したマネをモデルとし、その親友として、自分の分身である作家サンドーズを登場させている。

「制作」には、自分の個性を生かそうとして悪戦苦闘している仲間たちが登場し、画家と作家との友情が描かれる。その第三章において、制作に行き詰ったクロードは、仲間を求めてパリを歩きまわる。友人ファジュロールの家に行くが不在で、不快感を抱えながら、サンドーズを訪ねる。

彼はセーヌ川を渡り、まっすぐサン・ジャック街をたどっていた。いやはや、彼はあまりにも打ちひしがれていた。サンドーズの仕事の邪魔をすることになるのだが、無意識にクロードの足はアンフェール街に向かっていた。（中略）

クロードが入って行ったとき、サンドーズは机の上にかがみこみ、書きなぐった原稿を前にして茫然としていた。

「じゃまかな？」

「いや、朝から書きつづけだったので、もううんざりしているんだ。……一時間も前から、まずい文章の手

直して悪戦苦闘しているところだ。昼めしもろくろく喉を通らないしまつでな」

画家は、たまらない身ぶりをした。悲痛なクロードの顔を見て、サンドーズはその心情を察した。

「ああ、おまえもうまく行かないんだな。……出よう。元気づけにひと廻りしてこようじゃないか」

(中略) いま、二人の頭はまだ重く、ほとんど話さずに歩いていた。だが、いっしょにいることだけで、徐々に、気持が安まって来るのだった。<sup>14)</sup>

主人公たちの創作の苦しみが描かれ、都会を彷徨する姿、また、友による癒しが描かれている。これと同じような文章を、志賀の作品の中から拾うことができる。

仕事に対する執着、それから来る興奮状態は他からは一寸病的に見えた。近頃の英介は殊にそれが烈しかった。仕事に対する執着が段々強くなり、それが後戻り出来ないまでになった所で、自分の力に全く失望すれば、其人が自殺するのは当然の事のやうに思へた。(中略)

午後彼は三年町の綾野を訪ねて見たが、今日も留守だった。(中略)

蒸暑い日で、肌が何となくべとついて気持が悪く、彼は三年町の長い坂を陽に照らされながら、荷車でも押しているやうな心持で登つて行つた。頭が重く、身体がだるく、気分が苛々として、もう其処ら一帯、濁つた泥水で、自身はそこに浮び上つた錦魚のやうな気持がした。

(中略) 番町の伊作の家へ向つた。

洋館の細い階段を上つて一つ部屋を通り越して、戸を叩くと、

「あー」如何にも元氣のない声で答へた。

伊作は窓の下に籐椅子を据ゑ、それで眠つてゐたと見え、不平さうな不景氣な顔をして、ほんやりと薄眼で、入つて来た英介を見てゐた。その様子が如何にも參つてゐるので、英介は笑ひ出した。

「此錦魚も泥水に浮び上つてるな」

(中略)

二人は話だけでいい加減元氣になつた。

(廿代一面)<sup>15</sup>

主人公の米田英介は志賀自身、綾野は郡虎彦、伊作は里見淳をモデルにしており、志賀の日記から、ほぼ事實に即して書かれていることが確認される。

ゾラの「制作」は、当時よく知られていた作品であり、翻訳としても、その一部分、第二章の半ばまでが、高村光太郎によって、『スバル』誌上に断続的に訳出されている(一九一〇・二、三、八)<sup>16</sup>。第二章に、クロードとサンドーズがお互いの理想を述べあい、まだ叶わぬ夢を語ることに熱中し、それぞれに激しく興奮していく場面がある。クロードが、まだ形にできない「未来」を語る部分を、光太郎訳で見よう。

「今こそは全く別のものを要するのだ……。ぢや、それは何だ。僕は此だといつて指す事は出来ぬ。若し僕に其が解つて其を行ふ事が出来たら僕は非常な強者になるね。それこそ僕に敵する奴は居なくなるね……。

(中略) 僕等は日光を要するのだ。外光を求めてるんだ。明るい若々しい画が欲しいのだ。此の本当の光線の中に見える通りの万象を見たいのだ。が、まあ僕には其のさき言ふ事が出来ない。僕等の画がどうなる事か。今日の僕等の眼が何う見て何う画くべきものか、は一寸わからない。」<sup>17)</sup>

これと比較するために、実篤の「彼の三十の時」の一節を並べてみよう。

「まだ自分達は恐ろしく力が足りない」Kはさう云つた。

「何しろ今の自分達のする仕事は之からの仕事のうめくさだ。全力を出して何かかく度に自分の力の足りないことを思はないではゐられない。だが全力を出せる時は、生長しつゝあることを感じられるから希望は失はないが。何しろ自由に自分にあるものを出すより仕方がない」彼は何時も云ふことを今更にくり返した。

「やれるとは思ふね、又やらなければ仕方がない」

「何しろ僕達がやるより仕方がない、死にもの狂ひになつても。今やつてゐるものが出来上らなくつても、きつと何かやつて見せる」<sup>18)</sup>

主人公の「彼」のモデルは実篤、「K」は岸田劉生である。ここにも、まだ形にできない夢を、激しく、もどかしく求め続けて、友と語りあう作家と画家が描かれている。

「廿代一面」も「彼が三十の時」も、『白樺』同人たちのありのままの姿を写したものであり、他の作品を模倣



しようとしたものではない。しかし、描かれる人物たちの姿には、いくつもの共通性や類似性が認められる。模倣ではなく、ありのままの姿として、『白樺』のありようは西洋の近代文学のありように似てきているのであり、それが二十世紀初頭の日本の近代文学の位置であったと考えられる。

ヨーロッパの近代文学の〈環境〉を視野に入れながら、『白樺』について、その文学と〈環境〉とを検証していきたい。そして、そのことを通して、彼らにおける文学という営みの全体像を捉えていきたい。

## 注

- (1) 紅野敏郎「白樺」項目解説（日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第五卷「新聞・雑誌」、一九七七・一一、講談社）
- (2) 西垣勤「白樺派とその周辺」（『日本文学全史』第五卷「近代」、一九七八・六、学燈社）、のちに、西垣著『白樺派作家論』（一九八一・四、有精堂出版）に「白樺派の輪郭」と改題して収録。
- (3) 後藤末雄「第二次新思潮発刊事情」（複製版『新思潮』（第一次〜第四次）付録、一九六七・一二、臨川書店）
- (4) 志賀直哉「蝕まれた友情」（一九四七・一〜四、『世界』）。引用は、『志賀直哉全集』第七卷（一九九九・六、岩波書店）による。
- (5) 木下杢太郎「与謝野寛先生還暦の賀に際して」（一九三三・三、『冬柏』）。引用は、『木下杢太郎全集』第七卷「評論一」（一九五〇・一一、岩波書店）による。
- (6) 鈴木信太郎『フランス象徴詩派覚書』（一九四九、青磁社）。引用は、『鈴木信太郎全集』第四卷「研究Ⅱ」（一九七三・一二、大修館書店）による。
- (7) 高見順・志賀直哉対談「白樺派とその時代」（高見編『対談現代文壇史』、一九五七・七、中央公論社、のちに、筑摩叢書の一冊として再刊（一九七六・六）された）。

- (8) 本多秋五「『白樺』派の輪廓」(本多著『『白樺』派の文学』、一九五四・七、講談社、のち改訂を重ね、新潮文庫の一冊として刊行(一九六〇・九)された)。
- (9) 東珠樹「白樺派と近代美術」(東著『白樺派と近代美術』、一九八〇・七、東出版)
- (10) 中谷博「『白樺』」(一九五六・五、『文学』)
- (11) 注2に同じ。
- (12) 清水正和『ゾラと世紀末』(一九九二・三、国書刊行会)
- (13) ジョン・リウオルド著、三浦篤・坂上桂子訳『印象派の歴史』(二〇〇四・一一、角川書店)
- (14) エミール・ゾラ作、清水正和訳『制作』上巻(一九九九・九、岩波文庫)
- (15) 志賀直哉「廿代一面」(一九三三・一、『新小説』)。引用は、『志賀直哉全集』第二卷(一九九九・一、岩波書店)による。
- (16) これ以前にも、『明星』において、一九〇三年七月号に、「傑作？」というタイトルで、作品の冒頭部分の抄訳が、森しづかの名で掲載され、一九〇六年四月号、五月号、六月号、十一月号に、「外光」というタイトルで、第一章と第二章の終盤までの訳が、馬場孤蝶によつて発表されている。
- (17) 高村光太郎訳「制作 (EMILE ZOLA)」(一九一〇・八、『スバル』)
- (18) 武者小路実篤「彼が三十の時」(一九一四・一〇～一一、『白樺』)。引用は、『武者小路実篤全集』第二卷(一九八八・二、小学館)による。

(文学研究科教授)

## SUMMARY

Research on “Shirakaba” from the Perspective of “The Environment of Literature”  
 — An introduction to the Study of the Literary Magazine “Shirakaba” —

Yasutsugu SHIMIZU

“Shirakaba [White Birch]” is a literary coterie magazine that was in circulation for 13 years from 1910 to 1923. With contributions from many authors including Saneatsu Mushanokoji and Naoya Shiga, the magazine served as a vehicle for the publication of literary works and the promotion of critical activities. Moreover, the magazine introduced various aspects of Western art through its photographs and written articles. To study this multi-faceted magazine, adopting the perspective of “the environment of literature” is very useful. The objective of this paper is to serve as an introduction to the study of “Shirakaba” by presenting the theme and orientation of the research.

First, what sustained this group of literary artists for as long as 13 years? Friendship? In that case, was their friendship of a special nature? Did they share similar ideals? In that case, what were they?

In the early 20th century, the literary scene in Japan was characterized by the formation of various groups of aspiring artists, which led to various magazines being published and various gatherings being organized. Among all these magazines and gatherings, what made “Shirakaba” unique? And the activities around “Shirakaba” have many similarities with literary movements in 19th century Europe, such as the artistic movement started by Zola and others. The study focuses on the environment of literature in modern Japan through a comparison with that in modern Europe.

Moreover, “Shirakaba” was unique in that it was an art magazine. Why was this group so highly influenced by Western art? What sort of impressions did they receive from Western art? And what sort of relationship was formed between literature and art?

All of these questions constitute the main themes involved in the research of “Shirakaba”.

キーワード：『白樺』, 〈文学環境〉, 同人雑誌, 西洋美術紹介